

主日礼拝説教「あなたを神の子とする霊は」

日本基督教団石神井教会 2018年5月6日

【使徒書日課】ローマの信徒への手紙 8章22～27節

²²被造物がすべて今日まで、共にうめき、共に産みの苦しみを味わっていることを、わたしたちは知っています。²³被造物だけでなく、“霊”の初穂をいただいているわたしたちも、神の子とされること、つまり、体の贖われることを、心の中でうめきながら待ち望んでいます。²⁴わたしたちは、このような希望によって救われているのです。見えるものに対する希望は希望ではありません。現に見ているものをだれがなお望むでしょうか。²⁵わたしたちは、目に見えないものを望んでいるなら、忍耐して待ち望むのです。

²⁶同様に、“霊”も弱いわたしたちを助けてくださいます。わたしたちはどう祈るべきかを知りませんが、“霊”自らが、言葉に表せないうめきをもって執り成してくださるからです。²⁷人の心を見抜く方は、“霊”の思いが何であるかを知っておられます。“霊”は、神の御心に従って、聖なる者たちのために執り成してくださるからです。

【福音書日課】ヨハネによる福音書 16章12～24節

¹²言っておきたいことは、まだたくさんあるが、今、あなたがたには理解できない。¹³しかし、その方、すなわち、真理の霊が来ると、あなたがたを導いて真理をことごとく悟らせる。その方は、自分から語るのではなく、聞いたことを語り、また、これから起こることをあなたがたに告げるからである。¹⁴その方はわたしに栄光を与える。わたしのものを受けて、あなたがたに告げるからである。¹⁵父が持つておられるものはすべて、わたしのものである。だから、わたしは、『その方がわたしのものを受けて、あなたがたに告げる』と言ったのである。

¹⁶「しばらくすると、あなたがたはもうわたしを見なくなるが、またしばらくすると、わたしを見るようになる。」¹⁷そこで、弟子たちのある者は互いに言った。「『しばらくすると、あなたがたはわたしを見なくなるが、またしばらくすると、わたしを見るようになる』とか、『父のもとに行く』とか言っておられるのは、何のことだろう。」¹⁸また、言った。「『しばらくすると』と言っておられるのは、何のことだろう。何を話しておられるのか分からない。」¹⁹イエスは、彼らが尋ねたがっているのを知って言われた。「『しばらくすると、あなたがたはわたしを見なくなるが、またしばらくすると、わたしを見るようになる』と、わたしが言ったことについて、論じ合っているのか。²⁰はっきり言っておく。あなたがたは泣いて悲嘆に暮れるが、世は喜ぶ。あなたがたは悲しむが、その悲しみは喜びに変わる。²¹女は子供を産むとき、苦しむものだ。自分の時が来たからである。しかし、子供が生まれると、一人の人間が世に生まれ出た喜びのために、もはやその苦痛を思い出さない。²²ところで、今はあなたがたも、悲しんでいる。しかし、わたしは再びあなたがたと会い、あなたがたは心から喜ぶことになる。その喜びをあなたがたから奪い去る者はいない。²³その日には、あなたがたはもはや、わたしに何も尋ねない。はっきり言っておく。あなたがたがわたしの名によって何かを父に願うならば、父はお与えになる。²⁴今までは、あなたがたはわたしの名によっては何も願わなかった。願いなさい。そうすれば与えられ、あなたがたは喜びで満たされる。」

葬りから復活へ

先週は、連休の一日を充てて、3月に逝去されたA兄の埋葬式を執り行わせていただきました。A兄は、生前、ちょうどこの連休の時期が誕生日でいらっしやっただので、毎年ご家族が集まってお祝いの食事会をなさっていらしたのだそうです。今年は、その食事会の主役であるA兄がいらっしやらなくなられたわけですが、ご家族の皆さんは、同じ時期に納骨埋葬を執り行うこととされ、その後にA兄を偲んで今年も食事会をなさることにされたのです。

そのA兄の埋葬式を執り行わせていただきながら、わたし自身もちょうど十年前の連休中に亡父の埋葬をしたことを思い起こしておりました。家族・親族が集まり、祈りをもって墓地に埋葬し、やはり皆で共に食事をし、またそのときは、母とわたしの兄弟家族総勢20人で一泊の小旅行もいたしました。そのようにして、家族のきずなをあらためて確かめていたのかと思います。それから十年、実は、わたしは一度も墓参せぬままです。定期的に家族が集まることはしていますが、そろって墓地を訪れるようなことはなく、わたし自身、機会を逃して墓参せぬまま来てしまったようです。

念のため申し上げておくと、わたしは、決して墓参を拒んでいるわけではありません。わたしが育った教会の牧師は、しばしば、ご自身のお父上から生前、「自分は死んで墓に葬られても、墓にいるわけではないから、墓参りに来る必要はない」と言われていたという逸話をされる方でしたが、そうおっしゃりながら、ご自身も墓参を大切になされていらっしやるようなところがありました。わたしも、わたしが牧師として埋葬式を執り行わせていただくときには、必ず、参列されるご家族の皆さんに、定期的な墓参をお勧めしているくらいです。けれども、そうであるとしても、墓参をしなればいけないとも思っていないのです。

主イエスは、十字架の上で死なれた後、弟子たちの手によって墓に葬られました。そのとき埋葬に立ち会ったのは、アリマタヤのヨセフとニコデモ、そして女の弟子たちだったようです。十二弟子は誰も、埋葬に立ち会うことはしませんでした。それから三日目の朝、いち早く墓参したのは、女の弟子たちです。ヨハネ福音書では、その女の弟子たちの中でもマグダラのマリアに焦点が当てられて、その墓参の様子が伝えられていました。そして、その日以来、弟子たちは、主イエスの葬られた墓を訪れることは、二度となくなったのです。主イエスを墓の中に見ることがなくなったからです。主イエスがご復活なさったからです。

ヨハネ福音書は、ご復活なさった主イエスが、繰り返し弟子たちの間に現れられたことを伝えています。最初は、週の初めの日、つまり日曜日に弟子たちが集まっているところに現れられました。その後には、弟子たちが湖で漁をしているところに現れることもありました。日曜日の集まりにはもちろん、弟子たちが共にいるところには、いつでも、不思議なさまで復活の主イエスは現れてくださったのです。いつもいつもそのお姿をはっきりと見ていた、ということではないかもしれませんが、弟子たちは、祈るために集まったときや、何かを共にしているときに、そこにいらっしやる主イエスのお姿を見ることがあったのです。

「もう見なくなるが、また見るようになる」

福音書は、そのことをあらかじめ主イエスがお告げになられていらしたらしいことを伝えています。この場面は、主イエスが十字架につけられる前の晩、弟子たちと最後の食事を共にしていたときのことで、

主イエスは、この中で、「しばらくすると、あなたがたはもうわたしを見なくなるが、またしばらくすると、わたしを見るようになる」とおっしゃられています。主イエスは、ご自身がまもなく死んで葬られ、弟子たちの前から姿を見せなくなることを、そして三日目に復活なさって再び弟子たちの前にお姿をお見せになることを、お語りになられていた、ということなのでしょう。

ところが、このとき、弟子たちは、主イエスのおっしゃられた言葉の意味が理解できなかったというのです。中でも、主イエスが「しばらくすると」と言われたことが、強く引っかかったようです。どうして、この言葉に引っかかったのか、不思議な気もします。仮に、主イエスがお語りになられたときには引っかかっても、一度、死んで三日目にご復活なさった主イエスとお会いするようになってからは、もう気にするような言葉ではないようにも思えます。にもかかわらず、弟子たちの記憶の中に、この「しばらくすると」という主イエスの言葉に引っかかって残ったというのです。

どうやら、弟子たちは、このとき主イエスが「しばらくすると」と繰り返されてお語りになられたことを、単純に、主が死んで見えなくなり、復活して再び見えるようになる、というだけのこととして理解したわけではなかったようです。「しばらくすると」と訳される言葉を、ヨハネ福音書は、「ミクロン」という語を用いています。とても短いことを表す語です。日本語で「しばらくすると」というと、いささかのんびりした時間経過を想像しますが、むしろ、主イエスはこのとき「瞬時に」とさえ言われたのだと、ヨハネ福音書は伝えているのです。

「瞬時に、あなたがたはわたしを見なくなり、また瞬時に、わたしを見るようになる」。主イエスは、弟子たちの前で見えたり見えなかったりを繰り返される。今、見えていたと思ったら、次の瞬間には見えなくなっている。ところが、また次の瞬間には、そのお姿が見えるようになっている。主イエスをご自身のことをそのようにおっしゃられたのだとしたら、弟子たちが戸惑い、この言葉の意味を理解しがたいと思ったのも、致し方ないことだったのではないのでしょうか。

けれども、そのときには理解しがたいと思った弟子たちも、その意味を知るようになったのではないのでしょうか。だからこそ、この主イエスの言葉をしっかりと伝えることになったのでしょう。そして、ヨハネ福音書も、これをしっかりと記して、主の教えとして聞くべき言葉としたのでしょう。

主イエスを見る。そのお姿を見る。わたしたちは、教会に集まり、共に礼拝にあずかる中で、そう言い、またそれを信じています。ここで、わたしたちは、主イエスを見ている。そのお姿を見ている。けれども、それは、だれにでも、いつでも見えるような主イエスではありません。信仰によって見ているのです。わたしたちの間にいらっしゃるそのお姿を、チラチラと垣間見ているのです。

「神の子」を見るために

おわかりでしょうか。主イエスをご覧いただけているでしょうか。主イエスは、わたしたちの間にいらっしゃるのです。皆さん自身の中と、わたしたちお互いの姿の中に、主イエスはいらっしゃる。

もちろん、皆さんの姿は、はっきり見れば見るほど、主イエスには見えません。自分自身の内面を見つめても、かえって自分が主イエスとは程遠い姿であることに気づかされるばかりでしょう。わたしたち自身の人を見る目で自分や周りの者を見れば見るほど、そこに見えてくるのは、主イエスとはおよそ似ても似つかない、欠けの多い人間の姿です。わたしたちは、その点は、やはり、はっきりと言わなければいけません。自分のことにしろ、他の人のことにしろ、何かその人が主イエスに代わる立派なものを持っているかのように見ることは、できないのです。わたしたちは、見れば見るほど、問題のある、欠け多き肉の存在であることを、認めないわけにはいかない。

にもかかわらず、わたしたちは、そのような者の中に主イエスのお姿を見させていただく瞬間がある、というのも本当なのです。

主イエスは、わたしたちと同じように肉体をもって人生を歩み、そして死んで葬られた方でした。わたしたちと同じ弱さや欠けを持った人間として地上を生き、そして死なれ、葬られたのです。けれども、その主イエスは、御父なる神と一つでいらっしゃったのです。いいえ、主イエスは、人間と同じ姿であられながら、ご自身のすべてを神にお委ねになられて、御自らを神のものとなされたのです。子が父に委ねるように、子が父のものであるように、主イエスは御子として御父のものとなられていらしたのです。そうであればこそ、主イエスは、「父が持つておられるものはすべて、わたしのものである」とさえお語りになり得たのです。

主イエスは、しかし、そのような御父との関係を、ご自分だけのものとはなさいませんでした。弟子たちにも、同じ関係を御父と結ばせようとなさったのです。いいえ、わたしたちをも同じ関係で御父と結び合わせようとしてくださっているのです。そのような御父との関係へと、すべての人が入っていくことができるようにと、その道を拓いてくださったのです。その道の入り口となってくさったのです。

その道に、わたしたちは、すでに招き入れられています。聖霊を与えられているからです。主が約束された真理の霊は、すでに弟子たちに与えられ、教会に与えられ、わたしたちにも与えられているからです。使徒パウロは、聖霊が与えられていることは、わたしたちが「アッバ、父よ」と神をお呼びする一事によって、確かな事実であると教えました。それは、主がお教えくださったことでもあるのです。わたしたちは、すでに聖霊を与えられているからこそ、神を「父よ」とお呼びすることができるようにされているのです。主イエスと共に「神の子」とされているのです。

そうであればこそ、聖霊を待ち望みましょう。わたしたちを「神の子」としてくださる霊、神の子イエスのお姿を見させる聖霊の注ぎをこそ待ち望むのです。